

## 特集 政策支援・まちづくりと図書館 —図書館地区別研修(東海・北陸地区)—

平成30年11月13日(火)から16日(金)まで4日間の日程で、文部科学省・愛知県教育委員会主催、愛知県図書館主管により、平成30年度図書館地区別研修(東海・北陸地区)が愛知県図書館で開催された。

総参加者数は4日間で延べ594名。公立図書館、大学図書館、議会図書館、その他専門図書館など幅広い施設からの参加者が、政策支援・まちづくりと図書館について学び、議論し、考えた研修となった。

この研修を振り返り、図書館による行政・議会支援サービス、市民参加による図書館づくりなど、これからの図書館について考える。

### 平成30年度 図書館地区別研修(東海・北陸地区)カリキュラム

	日時	研修内容	講師/事例発表者等
11月13日(火)	13:30~13:50	開講式	
	13:50~14:20	文部科学省説明「図書館行政の動向」	柴 諭 氏 (文部科学省総合教育政策局教育人材政策課社会教育人材研修係長)
	14:30~16:00	基調講演 「岐路に立つ図書館—社会教育施設か、公の施設か?」	糸賀 雅児 氏 (慶應義塾大学名誉教授)
11月14日(水)	10:00~11:30	講義①「政策づくり」を支援する図書館の議会支援サービス～国立国会図書館調査及び立法考査局の国会へのサービスの現状を中心に～	泉 眞樹子 氏 (国立国会図書館調査及び立法考査局海外立法情報調査室主幹)
	12:30~14:10	事例発表①「大阪府立図書館の政策立案支援サービス」	大島 桂史 氏 (大阪府立中央図書館司書部調査相談課社会・自然系資料室長)
		事例発表②「天津市議会から見た議会と図書館との連携」	清水 克士 氏 (天津市議会局次長)
	14:20~15:10	事例発表③「田原市図書館の「行政・議会支援サービス」」	河合 美奈子 氏 (田原市中央図書館司書)
15:20~16:20	パネルディスカッション 「公共図書館の行政・議会支援サービスを考える」	パネリスト：講義①講師、事例発表①②発表者、豊田高広 氏 (田原市中央図書館長)、コーディネーター：米井勝一郎 氏 (愛知県図書館総務課企画グループ補佐)	
11月15日(木)	10:00~11:30	講義②「市民が支える私立図書館「曾田篤一郎文庫」と公立図書館との協力・提携」	宍道 勉 氏 (曾田篤一郎文庫応援団顧問)
	12:30~14:00	講義③「西尾市岩瀬文庫と「にしお本まつり」～市民ボランティアと本を介して取り組む「まちづくり」～	神尾 愛子 氏 (西尾市教育委員会文化振興課市史編さん室主査)
	14:10~15:00	事例発表④ 「豊橋市まちなか図書館整備推進室の地域連携事業」	田中 久雄 氏 (豊橋市都市計画部まちなか図書館整備推進室主幹)
	15:10~16:40	講義④とワークショップ 「本と人とを繋げる図書館員とは」	北村 志麻 氏 (墨田区ひきふね図書館パートナーズ代表)
11月16日(金)	10:00~10:50	事例発表⑤「チャレンジする公共図書館～図書館を核とした「まちづくり」、安城市アンフォーレの取組み～」	岡田 知之 氏 (安城市市民生活部アンフォーレ課課長兼安城市図書情報館長)
	11:00~12:30	講義⑤「公共図書館とマイクロ・ライブラリーの共生～まちライブラリーの事例と分析から考える～」	磯井 純充 氏 (一般財団法人森記念財団普及啓発部長)
	12:30~12:40	閉講式	

### 1日目：11月13日(火)

開講式、文部科学省説明の後、糸賀氏による基調講演「岐路に立つ図書館—社会教育施設か、公の施設か?」で、4日間の研修は幕を開けた。

糸賀氏には、主に文部科学省の柴氏の説明でも取り上げられた中教審での図書館の所管をめぐる答申についてお話しいただいた。

図書館の所管が教育委員会から首長部局に移った場合に懸念される政治的中立性についての議論などにも

触れながら、現状を細かに分析、解説していただいた。

近年の図書館は、まちづくりや地域振興に役立つ事業を行っている所も多い。「まちづくり」を行政そのものと位置付け、地域の課題解決支援のために、資料を集めるだけでなく、専門家や行政と連携したワークショップなどを行うことなどが提言された。



図書館に求められる役割は時代と共に変化しており、現在求められている「まちづくり」という役割を考えると、柔軟な対応が必要であることを改めて感じた。

この日の参加者86名は、糸賀氏の言葉に図書館の今後を考えさせられた様子であった。

同日夜には場所を移して懇親会が開かれた。会場では随所で図書館に関して熱心に議論が交わされた。

## 2日目：11月14日（水）

2日目は政策支援、議会支援をテーマに、講義、事例発表、パネルディスカッションが行われた。

国立国会図書館の泉氏による講義では、国の政策を支えるための調査など、国会図書館が担う重要な役割について、具体的な業務内容をお話いただいた。

午後は3つの事例が発表された。

まず、大阪府立中央図書館の大島氏から、行政職側には図書館のことがよく知られていないのでないかという認識から始められた活動の様子が紹介された。図書館が行政組織の中で存在感を高めるにはどうしたら良いのか、改めて考えさせられる発表であった。

大津市議会局の清水氏には、議会図書室が「倉庫化」していた状況から大学図書館との連携に至るまでを紹介していただいた。司書ではない立場だからこそ見えてくるものに考えさせられるとともに、その行動力、折衝力を多くの司書が身に着ける必要があることを思い知らされる内容であった。

3例目は愛知県内の事例として、田原市中央図書館

の河合氏から行政・議会支援サービスが紹介された。平成22年に鳥羽／伊良湖航路の存続に向けて開催した展示が、職員の意識を図書館の外へと向かわせるきっかけとなったとのことである。意識の面でのきっかけを話されたのが印象的であった。

この日最後は、泉氏、大島氏、清水氏に加え、田原市中央図書館長の豊田氏がパネリストとして登壇され、愛知県図書館の米井氏をコーディネーターとしたパネルディスカッションが行われた。

コーディネーターが会場内を歩き回りランダムにマイクを向けると、突然であるにも関わらず、参加者はパネリストに質問を投げかけていた。質問に対するパネリストの真摯な回答、視点を変えながら次々に参加者に質問を求めるコーディネーターという光景が繰り返され、緊張感と熱気にあふれたパネルディスカッションとなった。



行政組織の一機関である図書館が「行政支援」という言葉を使うことへの違和感や、行政・議会に対するレファレンスの際に留意すべき点など様々な話題が持ち上がった。

## 3日目：11月15日（木）

3日目は主にまちづくりがテーマ。市民と図書館の関わりからまちづくりを考えた。

島根県の私立図書館・曾田篤一郎文庫応援団顧問・宍道氏による講演では、氏の、そこが利用者自身の書齋となるような図書館という言葉が印象的であった。

西尾市岩瀬文庫からは、学芸員の神尾氏と6名の市民ボランティアの皆さんが登壇され、工夫を重ねた本まつりの様子などを話してくださった。神尾氏とボランティアの皆さんの和気藹々として澆刺とした様子に、岩瀬文庫が西尾市民に愛され、支えられて成り

立っており、まさしく西尾のまちづくりに貢献している様子をうかがい知ることができた。

次に豊橋市に平成33年度開館予定のまちなか図書館について、豊橋市都市計画部まちなか図書館整備推進室の田中氏にお話いただいた。イベントが多く展開され、既に街中の人やお店と繋がっており、まちなか図書館が目指す「世界を広げ、まちづくりに繋げる“知と交流の創造拠点”」に着実に近づいていることが理解できた。

3日目の最後は墨田区ひきふね図書館パートナーズ代表の北村氏による講義とワークショップ。ワークショップでは参加者がグループに分かれ、北村氏から次々と与えられる課題に取り組んだ。課題毎に設定された制限時間内に多くのアイデアを出すことを求められ、参加者には最初は戸惑いも見られたが、話し合いが進むにつれ、本と人とを繋げるためにできることなど、積極的に意見を交わす熱い光景があちこちに現れた。



ここで出しあったアイデアが持ち帰られ、それぞれの館で実践されれば、人と本を繋ぐ、まちづくりに役立つ図書館になるに違いないと思われた。

#### 4日目：11月16日（金）

最終日はまず、平成29年6月に開館した安城市図書館の、図書館も行政職も経験のある岡田館長ならではの、集客力のある公共施設としての図書館の強みを生かしたまちづくりの取り組みが発表された。

4日にわたる研修の最後を飾ったのは、磯井氏のまちライブラリーについての講義。何がやりたいのか、どうやったらそのまちで生きていけるのかを考えることが「まちライブラリー」であるという言葉が心に残った。これはまちライブラリーだけではなく、それ

以外の図書館にも当てはまることであり、多様な人の多様な声を聞いて、それぞれの人がそのまちで満足して暮らしていける助けとなる図書館となることが大切であると感じられた。

この4日間、幅広い館種の図書館員等が集い、政策支援をはじめ、各種図書館から発信する様々なまちづくりを多方向から見ることができた。

そこから見えたのは、こうでなくてはいけない、というものではなく、それぞれの図書館が、そのまちにあった方法でまちづくりに関わって行くことが重要である、ということだった。

この研修によって様々な取り組みや考え方を学び、議論したことは、参加者にとって今後の図書館の進むべき道を考えるきっかけとなったのではないだろうか。

#### 平成30年度図書館地区別研修 （東海・北陸地区）に参加して

（公財）名古屋まちづくり公社名古屋都市センター  
まちづくりライブラリー 伊藤 こづえ

平成30年度の図書館地区別研修（東海・北陸）は、11月13日から16日まで開催された。今回の研修の趣旨は、図書館による行政支援・議会支援サービス、市民参加による図書館運営について、議論を深めることだ。11月16日に行われた事例発表「チャレンジする公共図書館～図書館を核とした「まちづくり」、安城市アンフォーレの取組み～」に参加させていただいた。

お話していただいたのは、安城市市民生活部アンフォーレ課課長兼安城市図書館情報館長の岡田知之氏だ。

平成29年6月に開館した安城市の複合施設アンフォーレは大きな話題となり、マスコミにも取り上げられた。アンフォーレの計画に最初から関わっている岡田氏の講演は、当事者ならではの臨場感と実体験に基づいたお話で、興味深く貴重な時間を過ごせた。

事情を知らない者から見ていると、問題なく巨大図書館が誕生したかのように思えるが、新図書館の計画が策定された当初は、市長の疑問もあった。電子書籍が発展する未来に巨大図書館は必要なのかという問いは、米国東海岸の図書館を視察することで解消し、協力的になった。市長の疑問に対し、明確に回答できたのは、新図書館になる前から地道に改革を進め、ビジョンを持っていたからだろう。

満を持して開館した新図書館は、約1年後の平成30年7月22日に早くも入館者100万人を突破する。旧図書館から続けていた利用者目線に立った改革は、新たな図書情報館でも継続している。

民間資金を活用したPFIで整備したが、委託業者に丸投げせず図書館の運営は従来通り直営を維持している。フロアの会話と飲食を可としたり、利用者目線に立ち、NDCにとらわれないジャンル別配架等、新しい取り組みを積極的に行っている。

個人的に興味深かったのは、子どもたちの読書を推進するために学校と連携して本を定期配送していることだ。配送する図書は3種類で、学年別「朝の読書」用の図書【朝読便】、授業等で使用する調べ学習用図書【テーマ便】、図書情報館からの予約取寄せ図書【きーぼー便】だ。こうした地道な努力もあってか小・中学校への団体貸出が、2.8倍増えた。近年、日本の子どもたちの国語力の低下が問題になっているので、安城市の取り組みは、読書人口を増やす良い方策だ。

開館から1年が過ぎ、課題も見えてきた。課題のひとつである図書館を利用しない市民にいかに関書館の魅力を発信するかは、全ての図書館に共通する課題だ。

安城市図書館は、オープン7年目の数値目標として貸出密度12冊以上と、市民実利用者36,000人以上（市民実利用率19.1%）をかかげている。実利用者数や貸出冊数は、容易に増やせるものではないが、市民と同じ方向を見て、改革を実践し続ける図書館なので達成できるのではないか。安城市の街なかの賑わい創出と活性化をけん引するアンフォーレに図書館が重要な役割を果たしていることを業界に携わる者としてうれしく思う。

### 平成30年度図書館地区別研修 (東海・北陸地区)に参加して 豊橋市中央図書館 田中 久実

本研修は「政策支援・まちづくりと図書館」が全体のテーマであったが、どの講義や発表もキーワードは「連携」であり、行政の他部署、学校、NPOや企業等との積極的な関わりが「人と人を繋ぐ→まちづくり」へと繋がっていくこと、そして図書館はそれを行うのに最も適した存在だということを述べていた。

実際に私も、議会からのレファレンスや議会図書室への貸出を担当し「連携をしている」つもりでいた。

しかし本研修を受け、レファレンス件数の少なさや貸出した図書が適切だったのか等、数えればきりが無いほど不安な点が見えてきた。

事例発表によると、大阪府立図書館では政策立案支援サービスの利用を広げるため、幹部会議でのPRや案内チラシの配布等、行政への積極的な売り込みをしていた。田原市図書館では、議会に関する展示を行うことで市民と議会を繋げ、議会にとって図書館が重要な存在となるよう工夫をしていた。議会側にとっても、図書館が近い存在でなければレファレンスの依頼に至らないだろうから、このようなアプローチは大切なことだと思った。

私が勤務している豊橋市図書館の場合は、議会図書室への定期的な貸出など、図書館と議会との結びつきは既にあるので、さらなるアプローチとして、貸出の選書精度を上げ、議員活動に役立つことをアピールしたいと考えた。そこで「議会行き図書推薦掲示板」を図書館事務室に置き、書誌データメモを貼るだけで職員なら誰でも議会向けの選書をできるようにした。各分野の担当から、市民の関心が高い図書やお勧めの図書を推薦してもらうことで、広い視野でありながら精度の高い選書が実現するはずである。また、議会担当以外の図書館員にも議会を身近に感じてもらえるよう、整理休館日に議会図書室見学会を企画し、推薦しやすい雰囲気作りに努めた。

議会に図書館からの貸出を楽しみにしてもらえるようになれば、便利で重要な存在としてレファレンスの利用も増えるのではないかと思う。

研修テーマを聞いた時は、「政策支援」も「まちづくり」も私には荷が重いと感じたが、受講により、できることを一つずつ重ねていけば、人と人が繋がる図書館になっていくのだと実感した。今後は一人で身構えず、職員みんなで連携し、図書館の価値を高めていきたい。



写真は新たに作成した「議会行き図書推薦掲示板」。いつか開架コーナーにも設置し、市民からの推薦も受け付けたい。

## 会員館最近の話題から

### 「場」の創造—Yotteko 'ing'—

愛知芸術文化センター愛知県図書館 新海 弘之

愛知県図書館の1階の、現在Yotteko（ヨッテコ）部分の整備は、それまで本館に欠けていたグループ利用を対象とした閲覧席の配置と、1階エントランスという最も利用者の目を引く環境を有効に使うための少人数のワークショップや講演会を開催できるオープンな空間の創造をコンセプトの中心に置き、愛知県立芸術大学の夏目知道先生による全面的な指導・監修のもと、夏目研究室の学生諸君の協力も受けることで実現した。空間の設えは、緑あふれる1階の外部空間と室内空間の交響を企図して家具は木製とし、大理石の床とのコントラストを重視し、白を基調とした雲形のテーブルと展示用資材を調達するとともに、この空間の象徴である4台の展示架は県産材を特に指定した。



平成30年3月、夏目研究室から提案された5つの愛称案を利用者投票にかけ、Yottekoと命名されたこの空間は、ラップコンサート「あなたの“愛”をラップで伝えてみよう！」を皮切りに「繰り返し訪れたくなるような知的で明るい空間」を目指してオープンした。

この1年間、新しい利用者を図書館に招くためこの空間を活用しての様々な試みを実践してきた。そして、Yottekoへの利用者の定着とともに確実に1階の雰囲気は変わり、目指す「知的で明るい空間」へと変貌しつつある。しかし、本館がここに招きたい利用者は決して「受け身」の利用者だけではない。この空間、ひいては本館の「場所性」や「機能」を利用して、自己の情報発信を目指すプレーヤーとしての利用者も含んでいる。この空間は、様々な目的から図書館を「利用」する「利用者多様性」を受け入れる「場」である。

### 名古屋なんでも調査団初の公開調査 「鶴舞公園に龍がいた?!」の実施

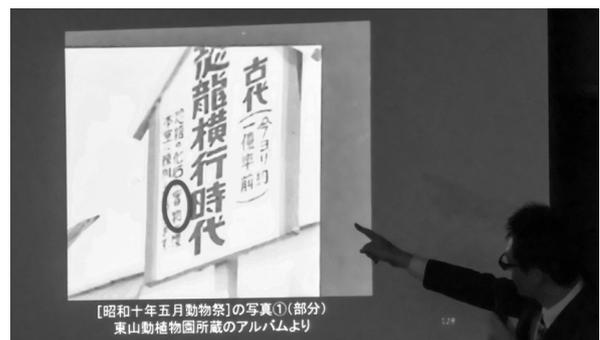
名古屋市鶴舞中央図書館 高木 聖史

名古屋市鶴舞中央図書館では、レファレンスサービスのPR及び地域情報の発信を目的とする名古屋なんでも調査団事業の取り組みの一つとして、鶴舞公園附属動物園平面図の「龍」の文字の謎に迫る公開調査及びその報告会を実施した。

当館駐車場の南には、かつて鶴舞公園附属動物園（大正7年開園、昭和12年に移転して名古屋市東山動植物園となる）があった。平成30年4月に100周年を迎えることから、参加型展示「みんなで作ろう！おりがみ動物園」等を企画し、その準備中、収容動物が詳しく書かれた昭和3年（辰年）の動物園平面図の中に「龍」のような文字を見つけ、これをきっかけに調査団初となる公開調査を平成30年3月17日に開始した。

公開調査は新聞、テレビ、ラジオにとりあげられ、多くの情報提供があったものの、目撃証言等から明らかになったのは、「龍」の文字の場所には「瀧」があったという想定していた中では最も地味な結果であった。そこで急遽、調査プロセスを絵日記風に紹介する調査日誌を順次公表し、10月27日に予定していた報告会の内容も新たにデジタル化した動物園関連資料のお披露目に路線変更して準備を進めた。ところが、報告会の3日前になって、デジタル化した鶴舞公園時代のアルバムの中に「恐龍の化石の実物が標本室に陳列してあります」と書かれた看板が写った昭和10年（亥年）の写真を発見する想定外の出来事があった。

調査のきっかけとなった謎の「龍」の文字とは場所も年代も異なるが、動物園には恐龍の化石があったというレファレンス記録風の調査団報告書を作成し、初の公開調査は終了した。



## 大学コンソーシアムせとビブリオバトル2018

瀬戸市立図書館 吉村 きみ

2005年から始動した大学コンソーシアムせと（以下、コンソーシアム）は、瀬戸市と近隣の5大学（愛知工業・金城学院・名古屋学院・名古屋産業・南山）が協働し、瀬戸地域の新しい文化活動を創成していくための組織である。生涯学習の支援、市民と学生の交流等、大学と瀬戸市が連携して各種事業を行っている。

生涯学習支援の一つとして、大学図書館の開放事業があり、市民は直接、大学図書館を利用することができ、瀬戸市立図書館（以下、市立図書館）に資料を取り寄せて借りることもできる。また、市立図書館から大学図書館に資料の貸出も行い、市民にとっては、大学の有する専門的な資料を手にすることができ、大学図書館においては、揃えにくい一般書を市立図書館から借り受けすることができる有益な事業となっている。

さらなる連携として、ビブリオバトルを協働開催することになり、市立図書館の新たな利用者の開拓、特に20歳代前後の来館者数が全体の8%未満であることから若年層の利用者の獲得を目指している。

「大学コンソーシアムせとビブリオバトル2018」は、11月18日（日）午後2時より市立図書館の集会室で開催し、参加者は56名となった。2015年から始まったこの事業は、今回4回目となり、コンソーシアム加盟大学の学生が運営委員となり、開催準備から当日の運営、進行を務めた。本を紹介する発表者は、大学生5名に加え、高校生が6名参加することになり、発表者5名が適正と言われる中、うれしい悲鳴となった。

このイベントの期待される効果は、若い世代の発想、アイデアにより図書館事業が活性化されること、学生が運営に携わることにより、地域社会に参画でき、社会貢献の場を持つことである。また、学内では得られない貴重な実践の場となっている。

質問タイムも盛り上がり、年配層からは「高校生、大学生から多くの刺激を受けた」、「学生がしっかりした考えを持っている」等の感想もいただき、活気あるイベントとなった。

愛知県子供読書活動推進計画（第四次）においても「高校生ビブリオバトル愛知県大会」の開催が謳われており、今後も高校生を巻き込んだ形で事業を継続させていきたい。

## クラウドファンディングの取り組み

—名古屋大学附属図書館—

名古屋大学附属図書館 竹谷 喜美江

名古屋大学附属図書館では、平成29年3月に「特定基金「名古屋大学附属図書館支援事業」」を設置し、若手職員によるワーキンググループを中心に、さまざまな支援事業に取り組んでいる。

クラウドファンディング（以下、「CF」）は、この支援事業の一つとして平成30年3月から2ヶ月間実施された。目的は「附属図書館が所蔵する、木曾三川に関わる国内最大級の古文書群「高木家文書」の整理・保存・活用」で、目標額は150万円であった。

<https://readyfor.jp/projects/TakagiDocuments>

特に力を入れたのは広報活動である。簡潔明瞭で魅力的なちらしを4,000部作成し、県外も含む図書館、博物館等60以上の機関に配布した。また、記者会見を行い、テレビ局や新聞社を通じて情報提供を行った。さらに、WEB上の広報として、SNS（Facebook）を立ち上げた。支援事業に関すること以外に、附属図書館のサービス紹介、イベントの告知、所蔵資料の紹介など、図書館の日々の活動を定期的に発信している。

CFの結果は、当初の目標を大きく上回る、244万4千円（達成率162%、支援者135人）であった。

支援者への特典は、金額によって異なるが、WEBサイトや銘板、蔵書票への芳名記載、図書館グッズの贈呈、イベントへの招待、貴重書見学ツアー、展示会の解説、などである。附属図書館では、平成31年5月までに全ての特典を完了すべく、感謝の気持ちを込めて鋭意取り組んでいる。

CFによって、私たちは直接の支援だけでなく、多くの方々に、「高木家文書」という東海地域の歴史的貴重資料の存在と、名古屋大学が資金に窮している状況を知っていただくことができた。加えて、現在も引き続き、支援者に日々の図書館の取組を伝える機会が頂けていることに感謝したい。



CF達成を総長と事務局長に報告

## PICKUP

## 児童サービス研修

ステップアップ：紙芝居

H30/12/14

児童サービスのさらなるスキルアップを目指して、児童サービス研修の連続講座とは別に、平成26年度から、児童サービスのステップアップ講座を開講している。これは、座学よりも、受講者同士の批評、アドバイザーからの助言・指導を重視した実践的なもので、これまでの4回はブックトークをテーマとして開催されてきたが、今回初めて紙芝居をテーマとして取り上げた。

アドバイザーに、各地で講座の講師をしていらっしゃる、紙芝居文化の会の道山由美氏をお迎えした。

定員が10名という狭き門に、紙芝居実演経験者という受講条件の下、施設会員、個人会員の方から多数応募があった。



事前課題に、アドバイザーから指定された紙芝居の実演が課せられ、研修当日、受講者の前で発表することとなった。普段、大人の前で紙芝居を実演することがないだけに、緊張する姿も見られた。しかし、そこはさすが経験者、実演を始めると、皆堂々たるものであった。そこに、受講者同士の感想・意見や、道山氏からの的確かつ細やかなアドバイスが加えられ、各受講者の実演はさらに磨き上げられていった。

質疑応答の時間には、紙芝居を演じる上で迷っていることなどが質問され、道山氏からの丁寧な回答に、受講者は皆納得の表情でうなずきながら聞いていた。

研修の最後に、道山氏による平和を願う紙芝居『二度と』の実演があり、その迫力に、一同その世界に引き込まれ、紙芝居の持つ力というものを改めて感じる事ができた。

## 愛知図書館協会 会勢

(平成31年2月1日現在)

施設会員	93
公共図書館	64
専門図書館	4
大学図書館	22
その他	3
個人会員	66
賛助会員	10
計	169

## 事務局日誌 (平成30年1月～平成31年2月)

H30/1/13	図書館講演会 「岩瀬文庫と市民ボランティア」 (愛知県図書館 以下県図)
1/16	研修委員会 (県図)
1/25・26	資料保存研修 (県図)
2/11	第12回日図協東海地区会員のつどい (共催) (県図)
3/1・2	統計研修 (愛知淑徳大学)
3/15	第2回理事会 (県図)
4/19	平成29年度会計監査
5/16	総会・第1回理事会 (県図)
6/1	研修委員会 (県図)
6/28	児童サービス研修① (県図)
7/13	児童サービス研修② (県図)
8/3	研修「図書館と個人情報」(県図)
8/22	第55回愛知県学校図書館研究会大会 (安城市民会館/安城市図書情報館： 長屋副会長出席)
9/14	児童サービス研修③ (県図)
9/28	レファレンスサービス研修① (県図)
10/11	児童サービス研修④ (名古屋市鶴舞中央図書館)
10/26	レファレンスサービス研修② (県図)
12/5	レファレンスサービス研修③ (県図)
12/14	児童サービス研修ステップアップ： 紙芝居 (県図)
H31/2/19	第2回研修委員会 (県図)
2/22	研修「図書館の危機管理」(県図)

## 新館自己紹介

## 高蔵寺まなびと交流センター図書館

平成30年4月1日開館

当館は、閉校になった旧小学校施設のリノベーションで誕生した図書館である。「まなび」「交流」「居場所」などをコンセプトとした多世代交流拠点の一つとして平成30年4月にオープンした。

コミュニティカフェ、地域包括支援センターのほか併設する児童館、こどもとまちのサポートセンターなどと共に地域の賑わいや未来を創り出すことを目指している。

## ■学校の趣を残した図書館

旧小学校施設を利用した細長い閲覧室と出入口が多い構造に対応するため受付カウンターを4か所設置している。一般用閲覧室は、2階全てを使用（10教室）しており、教室と教室の壁はそのまま残されているが各室を色分けし分かりやすくしている。

児童館が1階に設置されているので児童図書スペースも1階に配置し、児童館の利用者を取り込み、乳幼児期からの図書館利用に繋げられるように工夫している。児童図書スペースは2教室を使用し、絵本などの部屋、読み物などの部屋に分かれている。絵本の部屋には小上がりがあり、定期的なおはなし会や保護者が子供に読み聞かせをする場所として利用されている。



児童図書スペース



持込パソコン室



外観



一般閲覧室

## ■多様な学習室

Wi-Fiや電源が備わり、グループで学習することを主目的とした学習室が2部屋あり中高生を中心に利用者が増えている。また、自分のパソコンを持参し、学習の場として利用できる持込パソコン室（14席）も整備されており、同じくWi-Fiが利用可能であり、毎日のように利用される方もいる。

3階には学習室が2部屋（60席）あり、午前9時から午後8時まで常時開放している。高蔵寺まなびと交流センターは、中学校・高校が隣接しているため午後からは毎日混雑している。

## ■施設の概要

鉄筋コンクリート造3階建 3,669.86㎡

図書館部分：1,387.72㎡

蔵書数：開館時 約6.7万冊（約9万冊収蔵可能）

- 所在地：春日井市藤山台1丁目1番地  
電話 0568-37-4924  
FAX 0568-92-5792
- 開館時間：午前9時～午後6時まで
- 休館日：月曜日（休日の場合はその直後の休日でない日）、年末年始、特別整理期間
- アクセス：名鉄バス 藤山台東バス停徒歩10分